医事・文談（九百四十三）　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その231
子規と夏目漱石（四十たび続）

『漱石・子規往復書簡集』には、両者の間で自称や対称に、謙遜や揶揄や、敬称や、もじりなどがあることは既に何回か記述した。

それをここにまとめると次のようになる。

漱石（自称）から子規（対称）へ

菊井の里　漱石→丈鬼

菊井の里　野辺の花→明治の神谷うたた

菊井町のなまけもの→丈鬼

郎君→妾

埋塵道人→四国仙人

露地白牛→正岡詞兄

平凸凹→倫花児

平凸凹→物草次郎

凸凹→ものぐさ次郎

平凸凹→のぼる

平凸凹→子規

平凸凹→獺祭詞兄

子規（自称）から漱石（対称）へ

四国仙人　野暮流→漱石大先生

花風病夫→漱石大先生

花風病夫→漱石　雅契

蔗尾道人→漱石　雅契

往復書簡といっても、子規からのものはかなり失われていて、漱石と子規とは同数ではない。約20通が失われていて、手紙の保存などいう几帳面さに於いては、漱石は子規には及ばなかったようである。

しかも、このようなお互いに揶揄したり、卑下したりの戯称を用いているのは、知り初めた明治22年から、同25年までの約3年半ばかりに限られているようで、以後は、金之助・漱石、常規・子規と謹直に名乗っている。それは、子規の死の前年の明治34年に及んでいる。

尤も漱石は松山に赴任して、盛に俳句を作り、添削を乞う句稿を子規に送るにあたり、下宿に命名した愚陀仏庵主としたものがあるが。

子規は幼時より多くの雅号を撰んで自らつけたり、或いは師友につけてもらった。

先ず師につけてもらったのは、家が中ノ川の傍にあったことから「中水」とされたが、この名は気に入らず、殆んど使用しなかった。10歳の頃、庭前に櫻の大木のあることから「老櫻」と号したことがあるが、明治十四、五年（十四、五歳）の頃、書斎の額にと武知先生という人が「香雲」と揮毫してくれたので、それからは「老櫻」「中水」の号を棄てて「香雲」とばかり名乗った。香雲とは櫻花の形容である。

その頃、自ら撰んで「走兎」「風簾」「漱石」などとしたこともある。「漱石」はのちに、親友夏目金之助の号と変じ有名となった。

明治二十二年（二十三歳）、喀血してからは、子規と号し、それが公私にわたった通称となった。

しかし文章によっては、次の号も普通に用いるのである。

常規凡夫（蒸気ポンプの意）、丈鬼、獺祭魚夫、秋風落日舎主人、野暮流（幼名のぼるの意）、盆花、沐猴冠者、莞爾生、蕪翠、迂歌連達磨、馬骨生、色身情仏、虚無僧

また次の号は稀に用いるものである。

眞棹家（まさおかの音訳だろう）、嫦娥、冷笑居士（子規が皮肉で、友人をせせら笑うことから、他人がつけたものだろう）、放浪子、癡夢情史、蔗尾道人、四国仙人（以上の二つの号は漱石宛の書簡にも見える）、被襟生、浮世夢之助、有耶無耶漫士、情鬼凡夫（これも蒸気ポンプの意）、野球（幼名のぼるに野球（ボール）の字を宛てたもの）、都子規（みやこのほととぎすの意で、つねのりとよませたもの）

なおそのほかに、「裏棚舎夕顔」「薄紫」「蒲柳病夫」「病鶴痩士」「八釜四九」「面読斎」など。一橋外の高等中学寄宿舎にあった時は「一橋外史」、猿楽町に住んだときは「猿楽坊主」などなど。

以上は「筆まかせ」第二篇（自明治二十三年一月至同年三月中旬）に載るところである。

（表紙写真）

夕照（神威岬）

小樽市医師会　及川　馨

夕日に染まる海、日中は黒く見える岩峰が赤味を帯び、黒々とした洞窟の壁面の影が立体感を増し、印象強い画面となった。